

長谷川成一・千田嘉博編

## 『日本海域歴史大系 第四巻 近世篇Ⅰ』

岡崎 寛徳

本書は、論文十四編とコラム二編で構成される、近世の日本海域を主題とした論文集である。対象とする時代は豊臣政権期から近代初頭で、地域もサハリン・蝦夷地から朝鮮半島・対馬と広域にわたる。各論もそれぞれ内容が異なる。となると、寄せ集めの論文集となりがちであるが、本書はそうした感を持たない。それぞれが広域にとらえるだけでなく、細部にわたる分析も行っているためであろう。図表の多用も理解を助けてくれる。

まず、「第一編 環日本海域における異国との接触」の「第一章 豊臣政権の大陸侵攻と境界認識の変容」（中野等氏）は、豊臣政権の境界認識を明らかにしたもので、九州停戦令から秀吉死後までを対象としている。ここでは、バウンダリーとフロンティアという、ブルース・パットン氏による二つの境界概念を用いる。秀吉にとって日本の朝廷が構造の中心にあり、対馬海峡にバウンダリーの国境があるという感覚は稀薄で、「周縁」の被征服地域・権力を服属していくことでフロンティアの外延化をはかっていたとする。

「第二章 近世から近代に到る竹島（鬱陵島）認識について」（池内敏氏）は、竹島（鬱陵島）および周辺海域の権益をめぐる認識の変遷過程を論じる。山陰沿岸部の人々は竹島の利益を得ていたが、十七世紀初

頭は幕府も対馬藩も同島を朝鮮領と認識していた。元禄竹島一件では、当初朝鮮人出漁禁止を朝鮮政府に求める方針であったが、協議の末、日本人の竹島渡海は禁止となった。そして、幕末の志士らにより開拓が議論され、維新後にもその論が出されたが、日朝友好関係維持を優先する中央政府によって否定された。

「第三章 環日本海と漂流民―長門国における朝鮮船・唐船の漂流を中心に―」（木部和昭氏）は、朝鮮船と中国船の漂流・漂着について検討する。日朝間では安定的な漂流民相互送還体制が実現し、長門では藩と浦方民衆が協力して漂着朝鮮人に手厚い保護を加えた。一方、唐船は密貿易船が急増し、武装していることも多いため、漂流船に対しても厳しい対応がとられ、誤認打払い事件も起きた。対応の相違は、正式な国交が樹立されている「通信国」朝鮮国と、樹立されていない「通商国」中国との違いによるものと結論づける。

次に、「第二編 日本海域の城と鉱山」の「第一章 日本海域の城郭」（千田嘉博氏）は、中・近世都市考古学の状況を概説した上で、転機や課題を述べる。考古学の発掘調査の進展により、地域差や、戦国期拠点城郭から織豊系城郭への推移も明らかになってきた。また、馬出しを主な出入り口にもった城郭から、弘前城と聚楽第、福井城と篠山城、高田城と江戸城を事例として城郭プランの関連性を指摘する。さらに、山形城や金沢城の改修を指摘し、城郭部を含めた本来の「城下町研究」がスタートしていることを訴える。

「第二章 城跡にみる南部氏・津軽氏 近世大名への道筋」（関根達人氏）は、北東北の津軽氏と南部氏の城跡について検討したもので、発

掘調査成果と絵図からの比較分析を行う。出土陶磁器からは、従来の津軽氏本拠の移動説は疑問があり、三戸南部氏は頻繁に本拠を移動していた。また、津軽氏は家臣の弘前城下町集住が実現したのに対し、南部氏の場合は代官所の多くが城跡を一部利用する形で設置された。津軽では大規模開発との関係で、二カ所の城館が新たに築城されたと述べる。

「第三章 近世中期の対馬藩領佐須銀鉛山とその閉山」（荻慎一郎氏）は、対馬藩領佐須銀鉛山の概況と、元文二年閉山をめぐる諸問題を明らかにしたもの。佐須銀鉛山の繁栄期は短く、人口も生産高も減少していた。住民は藩に「御救」を求める一方、有力者の中には転出者もあらわれ、鉱山の衰退は府内などへの出稼進展に拍車をかけた。そして、閉山を主張したのは地域支配を担当する郡方で、鉱山住民には閉山と強制退去が伝えられた。一方、移住先では身分格付け等が問題となった。

「コラム 鉱業技術のネットワーク」（土谷紘子氏）は、秋田藩の金鉱山を中心に、直轄領鉱山と藩領鉱山の交流を描く。直轄領鉱山では、状況によって技術者を藩領鉱山に派遣し、技術や情報が交換された。後世に伝えるための記録も書き残されることとなった。

続く「第三編 環日本海における交易・交流」の「第一章 近世前期の日本海海運と商品流通―北国海運と西廻り海運の発展を中心に―」（印牧信明氏）は、日本海海運と商品流通の関係について分析したもの。初期豪商は日本海海運の発展に大きな影響を及ぼしたが、次第に一部の豪商のみに依存する時代から、廻船業全体の維持と繁栄へとという時代に変化する。また、敦賀・小浜から大津を経由したルートは、直接航路で大坂へと向かうルートとなるが、それには西廻り海運の発展が大きな影

響を与えていたとする。

「第二章 山丹交易と蝦夷地・日本海域」（佐々木史郎氏）は、山丹交易について、北方問題と日本海域との関わりから分析を進める。江戸時代中期までの山丹交易は密貿易の性格を有していたが、後期になると対外政治問題としても表面化していくようになる。蝦夷地は幕府直轄地となり、山丹交易も公認の対外交易としてその統制下に組み込まれた。また、山丹交易品は藩主間の贈答品に扱われ、寺社や町人にも普及していった。それは品質の良さと希少性があり、日本海を通じて多くの地域へ広がったという。

「コラム 北日本地域における富山葉売りの展開―松前藩領における売薬規制と福山築城―」（工藤大輔氏）は、松前藩領差し留めとなった富山の売薬業者が、福山築城献金により、一代町年寄任命などを得たほか、売薬規制解除の契機ともなったことを指摘する。

また、「第四編 日本海域の社会と信仰」の「第一章 巨大災害と民衆―近世青森町の大火災を中心に―」（長谷川成一氏）は、青森町を襲った近世後期における巨大災害の実態を説明するとともに、民衆の動向を考察する。弘前藩主導で都市形成が行われた青森町には、十八世紀後半から十九世紀後半に巨大災害が繰り返し起きた。天明三年の大火災と青森騒動や、嘉永六年の大町大火などがあり、民衆には不穏な噂も広まり、治安の悪化や社会不安が懸念された。また、有力商人らの情報収集能力の高さにも着目する。

「第二章 日本海域港町の空間形成」（宮本雅明氏）は、日本海に面する港町の都市空間構造について、中世と近世の相違に着目したもの。

中世においては水際線から内陸への街道沿いに向かって町家が建ち並ぶタテ町型の町割であったが、近世においては町家が水際線に沿って両側に並ぶヨコ町型の町割となっていた。中世起源の港町は両者が混在した形となっている。そして、港湾管理者の特定窓口を介した管理交易から、商人同士の直接取引が展開する市場交易へと大きく変化していったことを明らかにする。

「第三章 「真宗地帯北陸」の成立と展開―北陸道と日本海海運を媒介とした広がり―」（澤博勝氏）は、真宗を中心に北陸地域全体の社会基層的側面を検討。まず当該地域の真宗の展開を概観する。北陸真宗教団の基盤は、幕藩権力による宗教統制・寺院行政に対応して形成された。その中で「聖地」吉崎は、藩領や東西教団の枠をも超えて再興。そして、地域での社会関係は真宗信仰を中心に形成された面が重要な意味を持ち、学僧も重要な役割を果たした。在来信仰との関係も指摘する。

最後の「第五編 モノの移動から見た日本海域」の「第一章 日本海域をめぐる赤瓦」（久保智康氏）は、赤瓦の流通・動向について考察したもの。色合いから黒瓦と赤瓦に大きく分類される屋根瓦は、両者が並存していた。日本海沿岸各地の赤瓦は様々な場所生産されており、建物によって瓦の色分けがなされていたことを推測する。また、赤瓦は「中国風」を演出する意図としても使用された。そして、越前赤瓦職人は活発な活動を展開し、高い品質評価とともに、越前系赤瓦は広範に流通していったという。

「第二章 近世日本海沿岸地域における播鉢の流通」（庄田知充氏）は、日本海沿岸の近世消費地遺跡で出土した播鉢について、産地分布状

況や量的変化を検討している。播鉢は資料が豊富であり、定量分析が行いやすいなどの特性があるため、流通という視点からも着目しやすい。播鉢出土状況を消費地遺跡の産地別に見ると、肥前産・上野系・備前系・須佐産・丹波系・石見系・瀬戸系・越前産・北陸系・越中瀬戸産それぞれの分布があつた。また、消費地や太平洋沿岸諸都市との相違点から、各地域ごとの特性を明らかにする。

「第三章 近世日本海域の流通―金沢城下町遺跡の遺物組成から―」（増山仁氏）は、金沢の遺跡から出土した陶磁器の生産地を中心に、近世日本海域の流通状況を分析。早くから多数の肥前系陶器が金沢で使用されていることは、中世以来の日本海水運が機能していたためであつたが、のちに京・信楽系陶器が主体となっていく。また、他の日本海沿岸諸都市や太平洋沿岸諸都市との比較検討も進め、日本海水運の重要性を繰り返し指摘する。

人やモノ、そして社会の歴史的・地域的な広がりが見えてくる。また、概論を述べてから各論を展開するものも多く、一冊で多くの知識・教養を得ることができる。共通するのは日本海の重要性であり、それが日本の歴史に大きな役割を果たしたことを強く感じさせてくれる。続刊の近世篇Ⅱ（第五巻）との相違がより明確であればとの感想を持ったが、最初から通して読むにしても、興味のあるところから読むにしても、全編読破されることを是非ともおすすめしたい。

（A5判、四一九頁、清文堂出版、二〇〇五年、価格本体三八〇〇円）  
（おかざき・ひろのり 中央大学兼任講師）